

韓国 慶州・大田を訪ねて

高司 佐平

(会員・佐伯市宇山)

三月、古都慶州・大田を訪ねる旅に出かけた。私にとつては半世紀振りの訪韓である。

興亜日本の暁に大陸さすやまっしぐら!

望を乗せてひた走る光もすがし京釜線!

思わず口ずさんだ朝鮮鉄道唱歌の一節である。弱冠十六才の少年が夢を抱き、胸躍らせて関釜連絡船を降り立つと、棧橋には大陸行きの直通列車「興亜」「大陸」「ひかり」「のぞみ」や、京城行の特急「暁号」が黒煙を上げて待機する。大陸行きの玄関口として釜山港の活気に満ち溢れた様子が脳裏によみがえる。少年期京城への往来に何度目にした景であろうか。

過ぎ去った日々をなつかしく懐に浮かべながら、弥生町歴史文会韓国研修旅行参加の一員として、三月五・六・七日二泊三日の日程で、博多港十時発「ビートルⅡ世」ジェットfoilに乗船出港した。

玄界灘の荒波は凄かったが、船酔もせず老岐・対馬を見て十一時過ぎには朝鮮半島がはつきりと視野に入った。この頃には波もおさまって快適な船旅が続き、十一時四十分頃湾内に入った。船上から見た釜山の街並みの変貌振りには驚いた。かつての赤土の山肌は姿も見えず、港町釜山の面影はすでになく、そこには近代ビルの建ち並ぶ大韓民国玄関都市としての釜山の雄姿があった。歲月の流れはかくも変わるものと、今昔の思いが胸中を去来して止まなかった。

十二時五十五分着、棧橋に降り立ち懐に描いた駅舎はすでに跡形もなく、鉄道線路は、すべて撤去され、往時を偲ぶものは何ひとつなく、ただ車の往来と騒音に我を忘れ立ちつくしてしまった。

全員無事入国手続きをすませ、早速目的地の慶州に向け専用バスの旅が始まった。車窓に写る風景も、かつての朝鮮家屋は殆んど見当らず、近代建築の家並みが続き、昔を知る者にとっては一抹の淋しさを感じた。時折り赤土の山肌と赤松林に昔が偲ばれ、ほっとした気持ちになった。

我々一行を乗せたバスは、見事に整備された高速道を

順調に走り続けて慶州に到着した。早速今日の見学地「蔚山城」と「天馬塚古墳」へと向かった。

蔚山城は慶長二年（一五九七）、数万といわれる明と朝鮮の連合軍に包囲された。厳寒の中、籠城軍は寒さと飢餓と渇水の苦しみを味わい、軍馬に至るまで食するものはすべて喰い尽くし籠城に堪え抜いたといわれる。

名城ともいわれた蔚山城と将兵の様子を語るには、白杵城主「大田一吉」に従軍した「僧・慶念」の戦場日記

に、その様子が、

克明に書き記されている。この城の難儀は三つに極まった。それは寒さ・ひもじさ・水である。後年加藤清正は、熊本城築城に際し、蔚山城での籠城経験を生かして壁に干瓢を埋め込み、城内に

多くの井戸を掘って食・水対策に配慮したといわれている。

現在の蔚山城址は一部石垣に原型を見ることができ、その他はきれいに整地・整備され、立派な公園として市民の憩いの場になっている。

・註 蔚山城は加藤清正の築城

天馬塚古墳は新羅王朝伝説の始祖である「朴赫居世」と、その王妃と二代、三代、五代の王が葬られたドーム

型の古墳が並び、広大な松林に囲まれて静寂そのもの、又古墳を見る角度によっては、その形が不思議なように変わって見えるようであった。とにかく古墳のスケールの大きさに驚きの目を見張った。

第一日目の見学が終

わり市内レストランで



蔚山城址に残る石垣の一部



佛国寺正面入り口

夕食をすませ、慶州の「コーロン」ホテルに宿泊した。

第二日目は慶州佛国寺観光、佛国寺は壮麗にして精巧な新羅佛教芸術の最高峰といわれ、世界的文化遺産でもある。佛国寺は五三〇年に創建され、二〇〇〇年後の最盛期には十倍のスケールまで拡充されたが、「壬辰の乱」



佛国寺仁王像

で焼失。現在の建物はその後再修復されたものといわれるが、石造部分は当時のままで完成度の高さを今に伝えている。時間の都合で駆け足の見学となり残念至極、後髪をひかれる思いを残しながら再訪を是非実現したいと願っている。

午前八時三十五分、特急列車「セマール号」で次の見学地「大田」へ向かう。

十一時十三分「大田」着、専用バスで百済千年の都「扶余」へ向かう。思えば半世紀振りに扶余を訪れることが出来夢の様であった。脳裏に焼きついたかつての扶余と、現在の扶余の変容は想像も及ばず、あまりの変わり方に茫然とした。釜山にしても扶余にしてもその姿の変わり方には、歳月の流れをどうすることもできなかった。

京城に在学中、扶余神宮に勤労奉仕に行った思い出があるが、現在扶余神宮はなく記憶を辿れば現在国立扶余博物館の建っているあたりではなかったか?……。

当時神宮は市街が一望できる高台にあつたような気がするが……。複雑な思いを胸に現地の人に「扶余神宮」の事を尋ねても答は戻ってこなかった。

唯、往時と変わらぬ白馬江の流れは感一人の思いが胸中をよぎった。

栄枯盛衰時は移り、「百済」終焉の地「扶蘇山」と錦江「白馬」の豊かな流れは、悠久の歴史を秘めていた様に見える。思えた。

「扶蘇山」は別名「半月城」とも呼ばれ、百済の鎮山であり昔から扶余での代表的な名所であり、山城内の到る処には百済の遺蹟や伝説が数多く残されている。更に

歩を進め見晴ら

しの良い所には、

朝鮮王朝時代の

楼閣が再現され、

遊歩道も整備さ

れてゆつくりと

見学が出来るよ

うになっていた。

突端は断崖絶

壁で白馬江へ降

りる坂道の途中

に、新羅・唐の

連合軍に追い詰

められた官女三千人が、身投げしたといわれる「百花亭」がある。

その由来は官女の身投げが椿の花が落花する様に見える事から、又の名を「落花岩」ともいわれている。見下ろすとかかなりの高さがあり、追い詰められた官女達の心情を思う時、哀切の念にかられる。

白馬江をあとに国立扶余博物館の見学をすませ、「大田



扶蘇山より白馬江を望む

のりペラホテル」に二日目の旅の疲れを癒した。

第三日目は「セマウル号」にて釜山へ、午後二時「ピートルⅡ世」ジェットフォイルで無事博多港へ帰国した。

くおわりにく

少年の夢も敗戦と共に破れ去り、半世紀の月日がまたたく間に過ぎ去りました。

いつか訪韓したいという望みを胸に抱き続けていた矢先、弥生町歴史文会会長古藤田先生と事務局小野英治さんのお世話により、「弥生町歴史文会韓国研修旅行」に参加させていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

慶州・大田・扶余と歴史の跡を尋ね有意義な研修と、弥生町の方々と久々に楽しい旅が出来ましたことは、忘れ難い思い出となりました。現実の韓国を目前にして、今までのイメージが一変、見違える程復興近代化した韓国の発展した姿には、ただただ驚きのひと言でした。

「健康」という幸せに恵まれ訪韓の望みが叶えられましたが、再度機会があれば訪韓したいと思っております。